

Title	「がん医療の現場からみた心の問題」報告(2013年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催 スピリチュアルケア研究講演会)
Author(s)	関, 智征
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 38-38
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4960
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2013年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催 スピリチュアルケア研究講演会 「がん医療の現場からみた心の問題」 報告

2014年1月17日、聖学院大学総合研究所主催でスピリチュアルケア研究講演会が行われた。講演者は、埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科の大西秀樹氏。テーマは「がん医療の現場からみた心の問題」で53名の参加者があった。講演は、臨床経験に基づく多くの事例を紹介しながら進められた。以下は、講演内容の概略である。

講演は、なぜ大西氏ががん患者の精神ケアを行っているか、という話から始まった。それは大西さんが25年前の駆け出しの医師だった時、ある老婦人が息子に虐待をうけているのを目の当たりにした時のことだった。脱臼を4か月放置されていた老婦人の悲しそうな顔を見たことが、心のケアに携わる原体験になっているという。

がん医療は進歩したが、昭和56年以降、毎年がんは死因の第一位である。2012年でも年間35万人が、がんで死亡した（日本人は年間110万人が死亡しており、その約3分の1ががんで死んだ計算である）。がん患者は、様々なストレスを抱えながら治療を受けている。およそ、がん患者の二人に一人が精神疾患（適応障害、うつ病、せん妄）を患っている。

がんを告知された人はショックで、しばらく塞ぎこむ。通常、日常生活への適応度が戻るまで、2週間程度かかる。この時期に「不安です」と精神科を訪れる例も多い。

また、がん患者さんは、手術、科学治療、放射線治療などを施した後、「体がダルい」とやってくる場合がある。その体のダルさには、心のケアも関係している、という。「午前中は何もしたくない」「疲れがとれない」「眠れない」「食欲がない」などの訴えがよくある。ここで、「身体がダルいのは化学療法後だからしかたない」と考えるのは誤診のもとである。具体的には、うつ病の診断基準（抑うつ気分、興味・喜びの低下など）に照らして判

断するべき、という。

うつ病の患者の精神状態は、苦痛である。本人にとっては「死ぬほど苦しい」経験である。また、家族の精神的苦痛もあり、自殺率も上昇する。したがって、ケアは治療に必須。具体的には、倦怠感や食欲不振、耳鳴り、ふらつき、息苦しさなど身体症状がある時、うつ病の診断をしている。また、肩の痛みや尿道口の痛みが、うつ病の基準を満たしている例もある、という。

最期に、大西氏は、社会全体でがん患者や家族のケアの知識を身につける必要性を説いた。



講演者：大西秀樹教授（上段右）

（文責：関 智征[せき・ともゆき] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程2年）